現代社会における菩薩道

川田洋一

〔I〕 「共生の哲学」を求めて

——天人合一と一念三千

北京大学の季羨林教授は、池田SGI会長とのてい談集『東洋の智慧を語る』のなかで、中国のことわざ「三十年河西、三十年河東」を人類史における東洋文明と西洋文明の關係に当てはめて、次のように説いている。

「私の言っている意味は、西洋文化がすでに到着している基盤の上に、さらに一段階進めて、人類文

化を前代未聞の高みに引きあげようということだ。『三十年河西、三十年河東』という人類社会の進化の規律が到達できる目標は、これです。

正しいあり方とは、西洋文化の数百年にわたるあらゆる輝かしい功績を継承し、東洋文化の総合思考をもって西洋文化の分析思考の窮地を救い、全人類の文化をさらに高い、さらに新しいレベルに発展させていくことです^{〔I〕}」

そして、両者は、人類存続、繁栄の哲理として、人類史に登場する幾多の智慧、哲理のなかから、中国文

明の主軸をなす「天人合一」と仏教文明を貫く「宇宙即我」並びに「一念三千」論を抽出している。

池田SGI会長は、季羨林教授との「てい談」の智慧をも引きつぎながら、ハーバード大学のドウ・ウェイミン教授と「対話の文明」と題する対談を行っている。この対談の思想、哲学的中軸にも、中国文明の「天人合一」と仏教文明の「宇宙即我」がすえられている。ドウ教授は、「天人合一」を「人類宇宙観 (anthropocosmic vision)」と呼び、「儒教ヒューマニズム」を代表させている。池田SGI会長は、「宇宙即我」並びに中国仏教における「一念三千」論を「仏教ヒューマニズム」と表現している。

今、この論考では、この両者の対論を基点として、「天人合一」の構造と「宇宙即我」の中国仏教における哲学体系である天台の「一念三千」論の構造を相対させて考えてみたい。ドウ教授は日本の『中外日報』のインタビュアーのなかで、「儒教ヒューマニズム」が内包する現代的可能性を展開し、「天人合一」の構造を「人類宇宙観」として、次のように展開している。

『儒教ヒューマニズム』における最も高邁な目標とは、天と人間の合一です。儒教の伝統において、存在には自己・共同体・自然・天の四つの次元があり、これらの統合が目指されます。

その第一の段階では、身体・心・魂・精神を統合することによって、完全な人間を形成します。第二に、自己と共同体の有益な相互作用を図ります。共同体というのは家族、社会、世界など多様に解釈されます。第三に、人間と自然の持続可能で調和した関係を築きます。そして第四に、人間の心と天の道の相互作用を実現します⁽²⁾

ここに、「天人合一」「人類宇宙観」の四つの次元——自己、共同体、自然、天の統合が明示されている。「儒教ヒューマニズム」における「総合思考」（総合智）である。

一方、「一念三千」論は、中国の天台によって体系化された哲理である。「一念三千」の基本的概念は、衆生の起こす一念の心（生命）に、「三千の諸法」として記述される現象世界のすべてが収まることを意味してい

る。ここに衆生の起こす「一念」とは、環境との関連において生起する一瞬の心というが、究極的には、「実相」をさすという。つまり、身心、有情・非情、生命活動を支えているよりどころのすべてを包含した「宇宙生命」をさして「一念」とする。このような「一念」（瞬間の生命）をとらえて、詳細に観照すると、そこには三千（十界・十界互具・十如是・三世間）の差異相を具しているというのである。

現象世界を表現する三千という法数は、十界互具、十如是、三世間によって構成されている。今、ドゥ教授の示す「天人合一」の構造との関連性から、「三世間」の視座を中心に述べていく。

三世間とは、十界という境界、十如是という身心の活動が、具体的に現象世界に顕在化する「場」を三つの領域として記述した法理である。つまり、「一念」（生命）の活動は、「五陰世間」「衆生世間」「国土世間」という「生命場」に差異相として顕在化してくるのである。「五陰」が身心である。身心の相関を「色心不二」とも表現する。「衆生」は、現代的にいえば「共同体」

である。「共同体」は家族、民族、国家、世界にまで拡大していく。「国土」が大自然である。即ち、「衆生」が生を営む「場」である。現代的に表現すると、自然生態系である。「衆生」と「国土」の関係性を、「依正不二」と表現する。

さきほど引用した「天人合一」の構造と対比すると、存在の「自己」「共同体」「自然」「天」が、それぞれ「五陰」「衆生」「国土」そして「実相」（宇宙生命）としての「一念」に相応するであろう。儒教における「天」は、釈尊の悟達の顕現である「宇宙生命」（宇宙根源の法）に対比されるであろう。そして、「一念三千」論では、「一念」（実相）に相当する。「三千」としての現象世界が、「天人合一」での「自己」「共同体」「自然」に対応する。

ドゥ教授は、「天人合一」から、人間の宇宙創造における「使命」について、インタビューのなかで、次のように述べている。

「一神教の伝統では、神は自らの姿にかたどって人間を創造し、人間がすべての生き物を支配すると

説かれています。しかし儒教における人間は、世間の変容に積極的に関与することを通して、共同創造者となります。そして人間社会、自然環境をはじめあらゆる存在に対して責任を持つことになるのです⁽³⁾。

創価学会戸田第二代会長は、宇宙論の視座から、人間の宇宙進化における使命を、次のように述べている。

「この宇宙は、みな仏の実体であって、宇宙の万象ことごとく慈悲の行業である」⁽⁴⁾

と述べ、ここから、この宇宙に生をうけた人間の使命を導き出してくる。

「宇宙自体が慈悲である以上、われわれも日常の行業はもちろん、自然に慈悲の行業そのものではあるが、人たる特殊の生命を發動させている以上、人間は、一般動物、植物と同じ立ち場であってはならぬ。より高級な行業こそ、真に仏に仕える者の態度である」⁽⁵⁾「自覚した真の慈悲に生きなければならぬ」⁽⁶⁾

といわれる。

この大宇宙における人間の存在意義は、宇宙の「慈悲の行業」に自覚的、積極的に参画することである。宇宙の本然的な「慈悲の行業」とは、宇宙の創造的進化に他ならない。宇宙そのものに内包された慈悲力が発動して、創造的進化をなしとげていくというのである。そして、人間は、その「慈悲の行業」に参画し、宇宙の進化を促進するのが、その使命である。慈悲を体現しつつ、宇宙論的使命に生きる人格が、真実の仏教者の姿である。

ところで、仏教の「慈悲」は、中国において、儒教の「仁」に比定されている。中国の天台は、「仁慈も^{あわれ}て矜み養いて他を害せざるは、即ち不殺戒なり」⁽⁷⁾として、慈悲を仁に比定している。法華経（提婆達多品）では、羅什訳で「功德は具足して、心に念い口に演ぶることは、微妙広大にして、慈悲仁讓あり。志意は和雅にして、能く菩提に至れり」⁽⁸⁾とある。

儒教における「共同創造者」は、仁の徳を体現する人格であり、一方、仏教における「宇宙論的使命」に生きる人格は、慈悲の徳の体現者である。ともに、東

洋の「共生の哲学」を実践する人間像である。ここに、「仁」の徳を体現し、「天人合一」を実践しようとする儒教者と、「慈悲」の徳を体現し、「一念三千」の実践を志す仏教者との、現代西洋物質文明の「窮地」を救うための「協調」の領域が広がっているのではなからうか。

〔Ⅱ〕 大乘菩薩の現代的意義（1）

——誓願について

ドウ・ウエイミン教授は、池田SGI会長との対談の中で、「今、私たちは、他者や自然から切り離され、分断されています。そうした現代の暴力的な変化の危機に打ち勝つためには、『仁』の力、また大乘仏教の『慈悲』の力が必要であると訴えたい」と述べている。

憎悪や暴力性は、「儒教ヒューマニズム」でいう存在の四つの次元（自己、共同体、自然、天）を分断し、分裂させてしまう。「仏教ヒューマニズム」でいえば、「一念三千」の三世間をことごとく分断していくのである。まず、身体と心（自己、五陰世間）が分断され、次いで

家族、部族、民族、国家、国際社会（共同体、衆生世間）が、さまざまな段階で分断され、そして、人類と自然生態系（自然、国土世間）の間が切り離されていく。最後に、人間にとつての「超越的なもの」「根源的なもの」（天、宇宙根源の法）との間が切り離されていくのである。

生きた「人間」は、あらゆる次元で、憎悪や暴力性やその他の煩惱（悪性）のエネルギーによって分断され、宇宙生命の基盤も失って、アイデンティティを喪失し、孤独の底に沈んでいかざるをえない。

それに対して、儒教でいう「仁」徳や、大乘仏教の「慈悲」の徳等の「善性」は、分断の傷をいやし、あらゆる次元の存在と融合しつつ、大宇宙のなかに生きる人間の全体性を取り戻し、大自然との共生のなかで「根源なるもの」「超越的なもの」との結合から、アイデンティティを確立しつつ、自己の使命を見出すのである。

大乘仏教では、「善性」を開発しつつ、自他の共存を志向する人間群を「菩薩」としてえがきあげている。

大乘菩薩は、この世に生をうけた誓願、使命を自覚し、衆生救済のための菩薩道を実践していく。今、二十一世紀に生きる仏教者として、大乘菩薩の今日的意義を、使命としての「誓願」と、実践道としての「六波羅蜜」のテーマに分けて考えてみたい。

人間の安全保障委員会報告書『安全保障の今日的課題』（二〇〇三年版）は、そのなかで「人間の安全保障」の今日的な重要性を強調している。「人間の安全保障」は、国家よりも、生きた「人間」の生に焦点を当てる。現実の世界には、能力の強化を抑圧し、「人間開発」を阻害する脅威が余りにも多い。そのような脅威から「人間」を守り、人々が、畏れない自由で平等な生を営むために、「人間の安全保障」が要請されている。

そこで、第一に今日的課題である「人間の安全保障」の視点から、菩薩の「誓願」の意義をとらえてみたい。仏、菩薩の「誓願」は大きく「総願」と「別願」に分けられるが、「総願」として「四弘誓願」を取り上げ、「別願」の代表として、①薬師如来の十二願、②観世音菩薩の誓願を取り上げることにする。

(1)「四弘誓願」は、①衆生無辺誓願度、②煩惱無數誓願断、③法門無尽誓願知、④仏道無上誓願成の四項目である。

①は、あらゆる衆生の救済の誓願であるが、ここには、仏教としての「宗教的使命」と「社会的使命」が、ともに含まれていると考える。仏教の宗教的使命は、万人を成仏させることであるが、その条件をつくるためにも、社会の中の阻害要因に挑戦し、これを排除することが必要である。また、社会のなかの、人間の自由や平等や生命への脅威を除くための戦い、つまり「社会的使命」を果たしゆくことそのものが、菩薩道であろう。換言すれば、今日的意義における「人間の安全保障」を確保するための実践、奉仕が菩薩の使命である。

そのような使命を果たしゆくためには、②として、煩惱(悪性)を変革し、菩提(善心)を開発しなければならぬ。さらに、③として、法門を学びとろうとの誓いが要請されている。衆生の救済のためには、多様

な衆生の苦悩にに応じての、知識、技術、智慧等が具体的に必要となるであろう。菩薩自身の生涯学習である。以上のような人類社会救済をにかけて精進する生命のなかから、④の仏の無上の悟りを成就する道が開けてくるのである。

(2) 仏や菩薩は、「総願」とともに、それぞれの「別願」を立てているが、その内容を見ると、仏教者としての「宗教的使命」、つまり、すべての人々の成仏と、苦悩におちいった人々を具体的に救済したいという「社会的使命」が含まれている。

今、「社会的使命」——今日的意義では「人間の安全保障」に焦点を当てると、次のような誓願が取り出せるであろう。なお、「人間の安全保障」は、「欠乏からの自由」「恐怖からの自由」「人間が自らのために行動を起こす自由」の実現によって可能になる。

① 葉師如来の十二大願のなかから、上記の「自由」への誓願の項目の要旨を取り出してみる。

a. 衆生の必要とするものを不足させません

——「欠乏からの自由」

b. 一切の身体的不自由、病苦を救います

——「病気からの自由」

c. 衆病を治して、心身ともに安楽にします

——「病気からの自由」

d. 国家権力による一切の苦悩から衆生を救います

——「政治権力からの自由」

e. 餓渇の衆生に食事を与えます

——「飢餓からの自由」

f. 極度の貧困で衣服がないものに衣服を与えます

——「貧困からの自由」

② 観世音菩薩の誓願(要旨)⁽¹⁾

a. 大火に入っても火も焼くことができず、大水に流されても、浅いところにとどりつくことができます——自然災害という「恐怖からの自由」

b. 大海の中での羅刹の難を脱却できます。三千大千世界の夜叉や羅刹も、害を加えることができます——夜叉や羅刹(悪鬼)として示される

「暴力からの自由」

c. 三千大千世界の敵意ある盜賊から逃れられます

——「暴力からの自由」

d. 王難の苦に遭つて、刑によって命が絶たれよう

とする時に、「刀は尋いで段段に壊れ」ます

——「政治権力からの自由」「自ら行動する自由」

由

e. 「枷鎖」の刑具で束縛されていても、そこから脱

却することができません

——いかなる政治のもとにあつても「自ら行動

する自由」

このように観世音菩薩の慈悲の働きは、「暴力、災

害などのさまざまな恐怖からの自由」を確保しよ

うとしている。

〔Ⅲ〕 大乘菩薩の現代的意義 (2)

——六波羅蜜について

次に、六波羅蜜であるが、この菩薩の實踐は、「誓願」

を果たすための具体的實踐項目であり、①布施、②持

戒、③忍辱、④精進、⑤禪定、⑥智慧の六波羅蜜とし

て示される。ここでは、「人間の安全保障」を実現する

視座から、次の三つのグループにわけて考えていくこ

とにする。

第一には、布施と持戒である。これらは、具体的な

他者との関わりにおける倫理的、道徳的行為である。

善心を開発しつつ、他者につくすための具体的な行動

である。

第二には、忍辱と精進であり、ともに、忍耐強く菩

薩行をいかなる障害があるうとも、努力を重ねて、常

に乗り越えていく精神力の開発である。したがって、

第一の菩薩の具体的實踐や、次の第三のグループの仏

道修行を支える力である。

第三には、禪定と智慧である。禪定は、仏教におけ

る基本的な修行であり、釈尊の菩提樹下での禪定は、

さまざまな形で展開していくが、いずれも、「宇宙根源

の法(ダルマ)」の開頭をめざしている。

智慧は、仏教の智慧であり、縁起の智慧に他なら

ない。慈悲に根ざした「縁起の智慧」は、「宇宙生命」

にそなわるものであり、仏教の自然観、世界観として開示されていく。これらの三つのグループにわたる六項目を、現代に生きる菩薩行として述べていくことにする。

第一の布施行は、心のなかにある慳あおしみや貪欲の心を破すためとされる。布施には、財施、法施、無畏施があるが、財施や法施のめざすところは無畏施にある。現代における「無畏なる」生活とは、さまざまな「暴力からの自由」を確保し、「共同体に自由に参加できる自由」をもつことである。そして、その地域の豊かな自然生態系と特色ある文化、それらと調和してのBHN（ベーシック・ヒューマン・ニーズ）の充足をさしている。BHNの中核になるのは、水、食糧、医療、福祉等と、基本的な教育、安全性である。菩薩としての仏教者は、財施や法施によって、地域、共同体、民族の「無畏なる生活」のために貢献することである。

第二の、持戒は、善心を開發し、人間としての倫理性、道徳性を涵養することである。『梵網經』のなかに、さまざまな戒が説かれているが、そのなかから、在家

にも共通する四つの戒を取り出したい。

(i) には「不殺生戒」であり、非暴力、慈悲心の体現である。『梵網經』には「一切の命ある者は、ことさらに殺すことを得ざれ」⁽¹²⁾とある。これらは「暴力からの自由」をさしている。不殺生戒とは、生きとし生けるものに及んでいくのである。仏教は「生命圏平等主義」に立つ故に、生きとし生けるものの尊厳性を主張する。また、『スッタニパータ』には、「殺そうと争闘する人々を見よ。武器を執って打とうとしたことから恐怖が生じたのである」⁽¹³⁾とある。「不殺生戒」は、殺生のための武器の所有を禁止している。大量破壊兵器のみならず、通常兵器をも削減し、「世界不戦」への道を示すのである。

(ii) には、「不偷盜戒」は、「知足」の精神から出た戒である。仏教では「少欲知足」の人こそ、人間としての「富める者」「福なる者」ととらえる。「少欲」とは貪欲のコントロール（無貪）であり、当然のこととして、BHNの充足はかなえられなければならない。仏教は、物質的欲望や権力、名誉、名声に支配された人

間の生き方を「貧しいもの」「不知足」とする。「富める者」「知足」とは、自己の貪欲や怒りやエゴイズムをコントロールし、物質的欲望のみに執着する生き方から、他者とともに、精神的、倫理的に生きる方向へと昇華することである。

(iii) の「不邪淫戒」は、男女の平等、ジェンダーのあり方を示す倫理として、仏教では主張されてきた。しかし、その基盤となる精神からすれば、男女のみならず、人種、民族、文化等の「平等性」の倫理ととらえられよう。

すべての共同体、民族、人種は、それぞれの独自の文化、宗教、精神的遺産を保持し、発展させており、互いに認識し、尊敬し、学びあうことである。

個人、共同体、社会のなかにある、縁起の法¹⁴に無知なるところからくる「偏見」を克服し、「平等心」を養うための戒である。

(iv) の「不妄語戒」は、妄語、綺語、悪口、両舌によって他者をたぶらかし、お互いの「信」の破壊を禁ずる戒である。『梵網經』では「菩薩は、常に正語

正見を生じ⁽¹⁴⁾とある。「正語」「正見」とは、「真実」を語るということである。「真実語」によって、根源的な信頼が築けるのである。あらゆる紛争、環境問題等の「安全保障」の基盤には「信」がなければならぬ。相互信頼の醸成のためには、「真実」を語ることである。

第三の忍辱は、迫害、苦難、災害等を耐え忍ぶ精神力を体得することである。現実社会の「暴力・災害からの自由」を確保するためには、自己の瞋^{いかり}りや怨みをコントロールする強靱な精神力（能忍の力）が要請される。

現在の「テロ」とその報復の連鎖がとめどなくつづく「暴力の応酬」を断ち切るには、どこかで怨みの心をコントロールしなければならぬ。菩薩は、自ら怨みの悪心を慈愛の善心に変えようとする。忍辱の強力な意志で、慈愛の善心を開発し、怨みの根源を断つための行動を起こすのである。しかし、この忍辱は、ただ耐えるだけではない。その内なる力は、次の精進へと連動していくのである。

第四の精進は、忍辱の秘められた力が外にあらわれ

た形である。六波羅蜜では、他の五波羅蜜に身心ともに力を尽くし、精進することである。

現代的に表現すれば、「急進主義」に対する「漸進主義」となる。瞋り、怨念をコントロールする忍辱の精神力が、精進として発動してきて、「漸進主義」の形をとって他者へと働きかけていくのである。

「対話」や教育、文化交流、民間外交等を変革の手段とするのであれば、忍辱と精神力に支えられた漸進主義をとらざるをえない。この漸進主義は、善心の開発でもって、人間、共同体を、その底流から根本的に変革していくことをめざすのである。これが、菩薩の実践規範である。

第五の禪定も第六の智慧も、人間の「安全保障」、平和社会の実現の視座から、二つをセットにして考えていきたい。第五の禪定は、仏教的には、さまざまな禅の修行によって、心を一処に統一し、心を乱さずに、真理を思惟することである。真理を洞察する身心統一した「自己」のあり方と表現してもよいであろう。

それでは、そのような菩薩的「自己」は、現代にお

いて、どのような構造をとっていかなければならないのであろうか。私は、現代、この現象世界の真実の姿（実相）を洞察し、対応しうるための「自己」を、「多元的自己」と表現したのである。この菩薩的自己は、「多即一」「一即多」の法理を体現した構造をもちつつも、それが同時に「一」の調和、統一を確保している「自己」である。

「儒教ヒューマニズム」（天人合一）や「仏教ヒューマニズム」（一念三千）の説く存在の四次元に即している、「多元的自己」とは、身心統合の「自己」であり、共同体の多重性を反映する自己（家族的、民族的、国民的、国際的な各次元を反映する自己）であり、大自然生態系と共生する「自己」である。そして、それらの多元なる「自己」を統合する「一」なる「自己」は、「根源的なもの」「永遠なるもの」に根ざした「大いなる自己」である。「大いなる自己」に基盤をおいての、多元なる「自己」のダイナミックな調和をかなでる「自己」こそ、禪定のめざす菩薩的「大いなる自己」の内実なのである。

最後の「智慧」は、禪定と一体となった縁起の智慧である。仏の智慧は、一切の現象世界に通達し、真理（実相）をみきわめる智慧であり、慈悲と融合した智慧である。現象世界は、文化、宗教、人種、民族、国家、そして大自然界の多元性が幾重にも反映しあいながら、創造的進化を織り成している。そのような現象世界の真理（実相）を「縁起の智慧」は如実に知見していくのである。その具体的な様相は、多様性の次元では、各領域、地域の特異性、個性を洞察し、現場に即した智慧と慈悲の行動となつてあらわれる。

それと同時に、「縁起の智慧」は、「根源的なるもの」「永遠なるもの」に基盤をおく「普遍性」をも見出し、いく。そのなかには、「仁」徳や「慈悲」の善心、人間の根本的倫理性、道徳性（戒）、それにもとづく正義、福祉、平等の普遍的価値理念が含まれるであろう。これらの普遍的「共通項」は、全人類、全宇宙を貫く統合軸である。ここに、多元・多様性と統合性の調和的統合——多即一、一即多——の具体的な姿である「多元共生社会」が創出されるのである。

菩薩の「多元的自己」と「多元共生社会」は一体となり、他の四波羅蜜を統合しながら、人間の「安全保障」を宇宙論的次元から確保していくのである。

〔Ⅳ〕 菩薩道としてのSGI運動

二十一世紀をむかえた今日、大乘仏教の菩薩道を世界的次元で展開している仏教団体の一つが、SGIである。今日、SGIは、百九十九カ国・地域へと展開している。ここでは、SGI運動の内容を、「六波羅蜜」の実践という視座から分析し、検討してみたいのである。SGI運動は、これまで、「文化・平和・教育」という角度から記述されてきた。しかし、SGI運動を現代における菩薩道のあり方ととらえると、その内容分析のためには、「六波羅蜜」の各項目並びにその関連性の考察が、有効な方法論ではないかと考える故である。

第一の布施行を、「人間の安全保障」という観点からすれば、その実践は、今日、「積極的平和」の創出と「持続的な開発」に分けられるであろう。「積極的平和」

は、単に戦争がないという「消極的平和」をこえて、テロ、紛争、戦争という直接的暴力の底に広がる「構造的暴力」への挑戦までを含んだ概念である。

「積極的平和」の創出のためのSGIの実践基盤は、獄中における「宇宙論的使命」を自覚された戸田第二代会長の、一九五七年に発表された「原水爆禁止宣言」¹⁵にある。戸田会長は、「原水爆は生存の権利をおびやかす人類の敵である」と断じ、原水爆を使用したものは「絶対悪」として、いかなる者でも許してはならないという思想を全世界へ広めよとの提言であった。その精神と実践を、当時の青年の中心であった第三代池田会長が継承された。池田SGI会長は、人類の心に「平和の砦」を築くために、一九六〇年から、世界への平和旅に立出し、今日まで続いている。一九六八年の「日中国交正常化提言」（第十一回学生部総会）、一九七四年五月の初の訪中、十二月の周恩来首相との会見も、平和旅の一環である。

そして、一九七五年一月二十六日、第一回世界平和会議をグアムで行い、SGIが発足し、池田SGI会

長が就任することになる。SGI会長は、一九八三年から毎年、その年の一月二十六日に「平和提言」を全世界に向けて発信し続けている。

池田SGI会長の人類貢献への運動に呼応して、SGIは、国連のNGOとして、「平和創出」への貢献としては、これまで「核兵器——現代世界の脅威」展をジュネーブ、北京などで開催している。この展示による平和意識啓蒙運動は、さらに、環境問題も視野に入れた「戦争と平和展」「環境展——エコ・エイド」等へと拡大している。

平和意識啓蒙のためには、戦争体験をつづつた「反戦出版」集を発刊した。「戦争を知らない世代」が戦争体験を受け継ぐ財産にしていく企画である。また、「平和創出」への連続講演、出版などを通じ、核廃絶、世界不戦への啓蒙につとめている。

「持続可能な開発」については、国連の「持続可能な開発委員会（CSD）」の教育部会と連携しつつ、「変革の種子展」、映画「静かなる革命」の上映等の各国での巡回を支援している。ブラジルのマナウス市近郊に、

ブラジルSGIは「アマゾン自然環境センター」を創設している。このセンターと創価大学の自然環境研究センターが中心となって、「熱帯雨林再生プロジェクト」に挑戦し、これまで、六〇種以上、二万本の植樹を行っている。

第二の持戒は、人間としての倫理性の回復、形成である。SGIは、大乘仏教の非暴力、慈悲の根本精神にもとづき、自ら、内なる悪心をコントロールし、善心に変えゆく「自律」の人間の形成をめざしている。それは、そのまま、現代人の「ライフ・スタイル」の変革につながるであろう。

持戒とは、仏教的に言えば、「慈悲」等の善心の開発であるが、この戒を支える倫理性は、当然のことながら、儒教の基本的な「徳」（仁・義・礼・智・信）と同じ地平にある、その一つの成果が、「地球憲章」¹⁶の形成であり、SGIもその成立の過程で、仏教倫理の立場からの見解を反映させている。

「仏教ヒューマニズム」や「儒教ヒューマニズム」に内包された「人間倫理」——「慈悲」や「仁」の徳

——は、その拡大、啓蒙の手段としては、決して暴力等の急進主義ではなく、漸進主義をとる。漸進主義を推し進める菩薩行が、第三の忍辱と第四の精進である。

SGIは、漸進主義として、具体的には「対話」「交流」と「教育」に重点を置いている。池田SGI会長の対話は、トインビー博士との対話から、中国の常書鴻氏、金庸氏、季羨林教授等との対話へと続いている。また、一九八〇年の北京大学の講演をはじめ、ここ香港中文大学での講演など、世界の各大学、研究機関でスピーチし、世界の知性に訴えかけている。

東洋哲学研究所、ボストン二十一世紀センター、戸田記念国際平和研究所では、「文明間対話」「宗教間対話」を、儒教、道教、ヒンズー教、イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教の知性と連続的に、グローバルに行っている。東洋哲学研究所は、これまで、中国においては、北京の社会科学院世界宗教研究所とのシンポジウム、北京大学池田大作研究所とのシンポジウムを行ってきた。

次に、「交流」としては、創価大学の、北京大学をは

じめとする各大学との留学生、教授交換があり、SGIとしては、中国とインドに、青年派遣団、婦人派遣団を送って、民間の草の根交流をはかっている。

SGIの「教育」活動は、「牧口教育学」の実践化である。日本では、創価学園、創価大学を創立し、アメリカ創価大学にまで及んでいる。「牧口教育学」の展開は、今や世界に及んでおり、中国、東南アジアでは幼稚園、小学校の設立、インドでは創価池田女子大学が創設されている。また、教育を通しての地球市民意識への啓発として、国連と協力しての「世界の子どもとユニセフ展」「世界の少年少女絵画展」「世界の教科書展」を各地で開催している。

第五の禪定と第六の智慧は一体であり、SGIにおいては、第五の禪定としての「菩薩的自己」は、「多元的自己」であり、第六の智慧は、当然のこととして、縁起の智慧にもとづいている。SGIは、菩薩の生命の内奥から、「宇宙根源の法」を顕在化し、そのリズムによって、身心（五陰）、共同体（衆生）、自然（国土）のそれぞれを調和的に統合することを目指しているのである。

る。

共同体を「郷土」「民族」「国家」「国際次元」の多元性としてとらえれば、SGIの「菩薩的自己」は、「郷土」という生活現場に活動の場を置き、その場を拡大しつつ、他の民族、文化、宗教、国家へと関連させつつ、なお、そのビジョンは人類的思考にまで及んでいくのである。菩薩の生命としての地球市民の「自己」とは、「ローカル」の現場性をしっかりとふまえつつ、「グローバル」な理想を漸進的に実現していこうとする「自己」である。現場性（ローカル性）と普遍性（グローバル性）を内包しつつ、しかもどちらかのみに偏するのではなく、両者を生かしつつ生きる「自己」が、禪定としての「自己」である。

このような「自己」は、「中道」に生きる「自己」である。「宇宙根源なるもの」の統合力に基盤を置き、エスニックな次元から、地球、大自然のグローバルな次元を、多元的、多重的に統合する「自己」こそ、二十一世紀の地球市民の「自己」にふさわしいと考えている。

このような地球市民としての「菩薩的自己」に内包された「縁起の智慧」が、第六の「智慧」である。この縁起・中道の智慧が、現実社会のなかに「多元共生社会」をつくり出し、そのような社会に栄える「文化」が「平和の文化」である。「平和の文化」は、各民族、文化圏、宗教圏の精神性を十分に尊重しつつ、なお、普遍性としての非暴力、慈悲、仁の人間倫理に貫かれている文化である。「平和の文化」は、他の民族、文化をお互いに尊重しつつ、学びあうことによって、相互に触発されながら、自らも創造的に変化していくのである。「文明間対話」「宗教間対話」の目的の一つもここにあり、各文化、文明、宗教の互いの創造的変革が期待されるのである。

「戦争の文化」から「平和の文化」への変革のために、SGIも、文化、芸術、学術の次元での貢献にとめている。たとえば、東京富士美術館や民主音楽協会では、中国の敦煌美術をはじめとして、人間としての「善性」「感性」の開発につとめている。

東洋哲学研究所としては、現在、「法華経展」をグロ

ーバルに展開中である。これまで、日本、ヨーロッパ、インド、東南アジア各国で開催され、今回、ここ中文大学でも新たな展示が予定されている。「法華経」に秘められた「宇宙根源なるもの」から顕在化する普遍的思想性を、これらの展示を契機として学びとっていただければ、との思いからの展示である。

以上、大乘仏教の基本の実践である「六波羅蜜」の各項目にそいながら、SGIの具体的な思想と活動を分析してきた。

最後に、SGIの現代社会における活動が、中国をはじめ全世界の人々とともに、お互いに地球市民として、人間生命内在の「徳」性、「善性」を開発しつつ、その大いなる「連帯の潮流」が「平和の文化」創出への原動力となることを希求している。

注

(1) 季羨林・蔣忠新・池田大作「東洋の智慧を語る」東洋哲学研究所、四一〇ページ。

(2) 『中外日報』二〇〇五年六月二日号。

(3) 『中外日報』二〇〇五年六月二日号。

(4) 戸田城聖「慈悲論」『戸田会長全集』第三巻、聖教新聞社、四四ページ。

正式に発表された。

(5) 同書、四五ページ。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)

(6) 同書、四八ページ。

(7) 『摩訶止観』第六上、『大正蔵』四六巻七七ページ上—中。

(8) 『妙法蓮華経並開結』創価学会版、四〇六ページ。

(9) 『第三文明』二〇〇六年五月、五二ページ。

(10) 『薬師本願功德経』『大正蔵』一四巻四〇五ページ上—中。

(11) 『妙法蓮華経並開結』、六二三—六二四、六三四—六三六ページ。

(12) 『梵網経』巻下、『大正蔵』二四巻一〇〇四ページ中。

(13) 中村元訳『スッタニパータ ブッタのことば』岩波文庫、二〇三ページ。

(14) 『梵網経』巻下、『大正蔵』二四巻一〇〇四ページ下。

(15) 創価学会戸田城聖第二代会長が発表。『戸田城聖全集』第四巻、聖教新聞社、一九八四、五六四—五六七ページ。全民衆の「生存の権利」をまもる普遍的立場から、核兵器を「絶対悪」とであると宣言したもの。

(16) 「地球憲章」。一九八七年にブルントラント委員会が、地球市民が「持続可能な開発」をなすための行動指針として制定を呼びかけた。ミハイル・ゴルバチョフ等が中心となって草案作成が開始され、その過程でSG Iも参加している。二〇〇〇年六月、ハーグにおいて